

羅城門らじやうもん

〔大内裏の御時、平安城外郭南面の正門にして、朱雀通しゆじやく（今の千本通をいふ）九条大路にあり。今四よつ塚づかの民家東類の奥に礎石遺れりといふ。日本紀に曰、天武天皇八年十一月難波なにはの都に羅城を築くといふ。抑羅城の名義は、三代実録及び拾芥抄にも其説詳ならずと書り。東涯制度通に曰、通鑑唐懿宗紀に、不レ移レ時克三羅城、胡三省の註に羅城とは外の大城なり。又唐書高祖本紀曰、築三京師羅郭一起三觀于九門一。又朝鮮てうせんの訓蒙字会に曰、外郭称三羅城一。愚按、外郭の番兵を羅卒といふ、羅絡の義なるべし。此諸説にて羅城の名義諦にして、平安城総郭の門といふ事なり〕

小世継物語曰

柏原かしはばらの御門

〔桓武天皇くわんむ〕

の御時に、平の宮作らせ給ふ間、長岡ながをかの宮より時々行幸して、あたらしく作

らる、都を御覧するに、らせい門の辺にて御輿をとめて、たくみを召て仰られけるやう。いとよく門はたてたり、但たけなん一尺きるべき、風はやき所にひとつ屋にてたてたれば風の為に危きなり、長今少しまさりおとりにしたがひて防がる、事なれば、地の体に随ひて長のほどはたつるを、此頃の工はそれをしらで屋をたつれば、此門今壹尺きれ、さらばよかりなんと仰られて、帰せ給ひぬ。扱造りはて、遷都近くなりて、初の如く門の前に御輿を止て御覧するに、瓦ふきに白土皆塗はて金物許うたざりけり。工を召て仰らる、やう、われはじめあしく見て一尺きれといひてけり、一尺五寸きらすべかりける、今五寸切るべし高く見ゆると仰ければ、工ふしまろび、おぢかんじて、さまあしくふるうやうにすれば。あやしく思召て、いかにかくはするぞと問せ給へば工申やう。此門の長は本の門のやうに立合せさぶらふを、一尺切と仰られしが、仰のま、切ては無下にひきくなり、遠く見あぐるに高やかにさ

ぶらうこそきらくしくさふらへ、かゝるはなれ屋のひらに見へたらんは見苦敷さふらひぬべしと思ひて、五寸を切てさふらうなり、それに今五寸と仰さふらへば、始御覽じそこなひたるにはさふらはず、五寸かくして切さふらはずと申。御門かしこく見てけり、こぼち切ば都遷の日ちかくなりてえあはせじ、さらば其通はあるべし、但風にもすれば吹たふれんと仰ありければ。工いみじく作りてさふらうものなり、五寸切さふらひぬれば更にあやうき事さふらはじと申けり。扱都うつりの後末の世にいたりて三度許吹たふされたり。御門の御覽じたる事かなひにたりいみじうおはしましけり。扱円融院えんゆうゐんの御とき大風に吹たふされてけり。其後は作る事なし。

洛外惣土堤らくぐわいそうどて

室町殿日記追加云、天正十八年の頃〔豊臣秀吉公〕六十余州属御手四海静謐に治りしかば、玄以法印げんいほういん

法橋紹巴ほつけうせうはをめして、潜に洛中の堺を御覽ぜらるゝに。東は高倉たかくらよりあなたは鴨河原かもかほらなり。遙に見渡し給へば、平くと

東山にとり続て、耕作の地なり。西は大宮おほみやよりあなたは嵯峨太秦さかがうづまさへ押通て田畠なり。南北の際も何とも堺もなく、只田

舎の在郷の如し。幽斎いゆうさいを召て、花洛とは昔より言伝へぬれども、京都きやうとの有様は在郷にひとし、北は何れより南は是まで

といふ洛中洛外の堺を、末代迄相定べし、都の旧記をきかばやと仰出されければ。幽斎いゆうさい畏て釈せられけるは、桓武天皇くわんむてんわう

延暦三年奈良ならの京より長岡ながをかの京へ遷給ひて、十年にして当国葛野郡宇多村かしのこほりうだむらを見せ給ふに、四神相応の地なりと申によつ

て、愛宕郡あたぎのこほりにまします。同十三年此京へ移給ふ云云。油小路あぶらのこうちを中に立て条里を割給ふ、東は京極迄きやうごく、北は鴨口かもくち、南は九

条^{でう}までを九重の都と号せり。油小路より東を左^さ近、西は右^う近と申。右^う京は長^{ちやう}安^{あん}、左^さ京は洛^{らく}陽^{やう}と号す。されば内裏は代々少づ、替とは申せども、洛中洛外の堺は聊も違ふ事なし云云。法住院常徳院の時代より此京衰へ申、やゝもすれば戦場と成に付て、万民跡を止ず都鄙の往来なきによりて自零落すと聞候。秀^{ひで}吉^{よし}公聞召て、さあらば先洛中洛外を定べしと、諸大名に仰付られ、東西に土堤をつかせ給ふ。扱一切の寺院洛中に充満て在家に並びければ、徳^{とく}善^{ぜん}院^{ゐん}に仰付て諸寺は京^{きやう}極^{ごく}より一町東へをし出して、北は鴨^{かも}口^{くち}より南は六^む条^{じやう}まで片面に屋敷をわたさるゝと云云。